

第2回日食勉強会報告

編集部

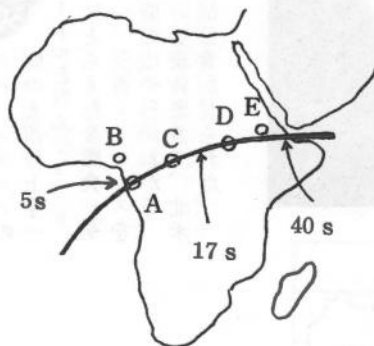
来年にせまった沖縄金環日食を中心に、第2回目の日食勉強会が、9月23日に開催されました。会場となった工学院大学8階第一会議室には、予想を大幅に上回る、100名余の参加者が集まり、金環日食への関心の高さを反映しているようです。

勉強会報告を発表順に以下にまとめましたが、日食情報に発表するものについては割愛しました。

ガボン日食の概要 塩田和生

来年3月29日に南大西洋からアフリカ中部を通る日食がある。一応ここでは「ガボン日食」と呼ぶことにする。この日食は、金環皆既帯が狭いのが特徴。明け方と夕方にこの日食が見える地域では金環となり昼間の地域では皆既となる。このようなことが起こるのは、明け方と昼間では地球の半径分、太陽の大きさが違うためだ。アフリカでの気象条件は東の方がよさそうだが、ベイリービーズが見られそうなガボンの方が魅力がある。大西洋上のセントヘレナ島は残念ながら、皆既帯は通らない。

このような金環皆既日食は、次回は2005年4月8日のニュージーランド沖からパナマにかけて起きる日食までまたなければならない。



A : ガボン・リーブルビル

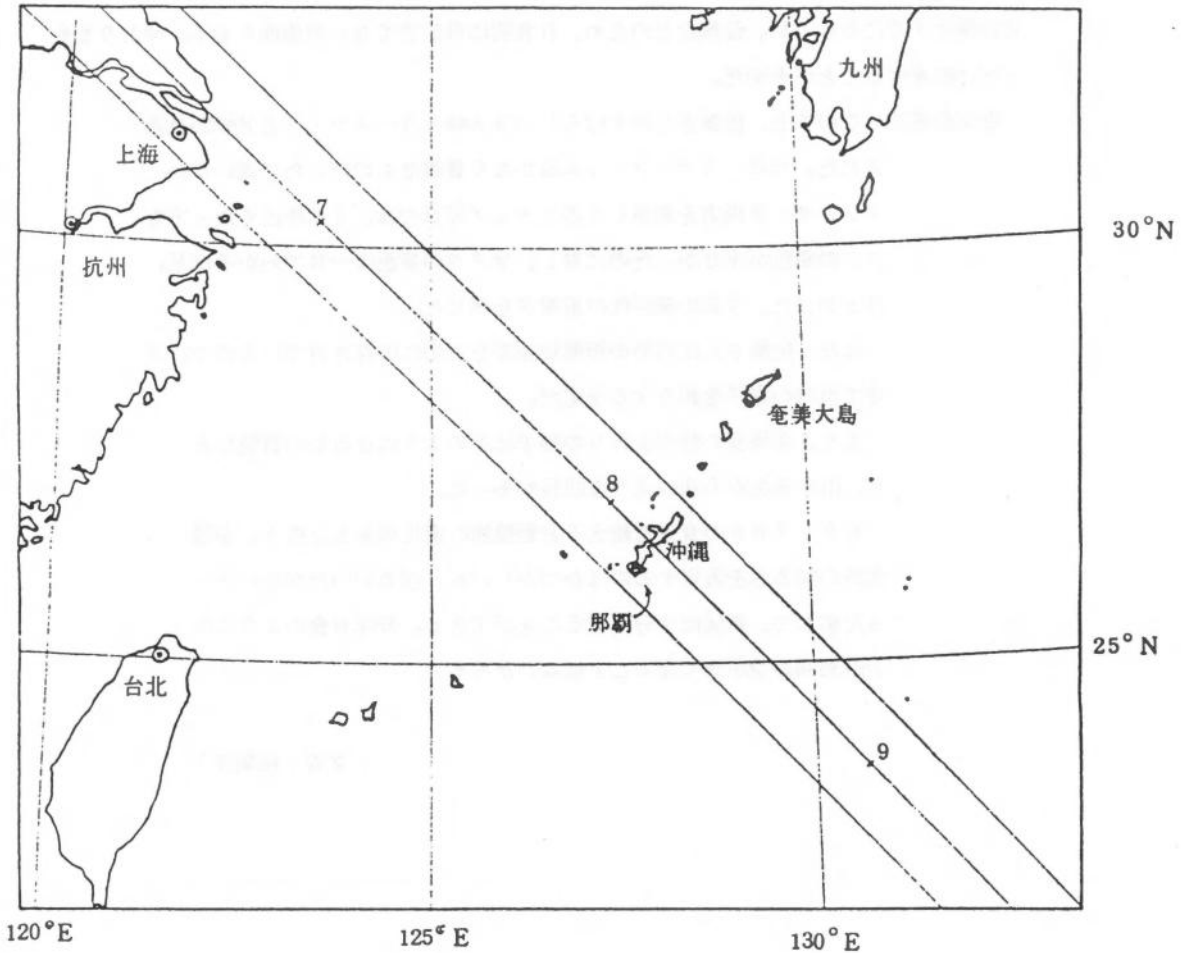
	月平均気温 T (°C)	月平均降水量 R (%)
A	27	40
B	25	146
C	28	104
D	30	3
E	22	10

沖縄金環日食の概要 山口正博

ガボン日食のように3月に起きる日食は南から北へ中心線が上がっていくのが特徴。9月に起きる沖縄金環食は北から南へ中心線が下がっていく。

沖縄金環食は、那覇を中心に沖縄本島がすっぽり金環帯に入ってしまう。58年の八丈島金環

食では食分 0.94 だったが、今回は 0.97 で環はよりうすくなる。継続時間は当然、短くなる。八丈島のときは、金環食が始まる時、ブツブツとしたベイリービューズがみられたと記憶している。月のリムを観測できるチャンスだ。コロナは無理。台風さえこなければ良い条件で見られるだろう。12 時前後に観測できるのも良い。高度が 60 度余りなので、望遠鏡も向けやすい。中国大陸で観測する計画もあるようだ。中国の方が金環の時間が長くなる。



1987年9月23日の金環日食

金環日食の観測 秦 茂

※編集部注 I、沖縄への旅 II、光電測光

の2つについて議義があった。Iについては本号に掲載。IIについては次号に掲載する予定のため、内容については省略する。

八丈島金環食(1958年)の観測 佐藤 精一

当時は天文年鑑にも、八丈の金環の様子はかかれていなかった。さすがに理科年表には載っていて参考にした。前日まで悪天候で、東京を出発できなかった。もうだめだと思っていたが、日食当時に天気が回復し、朝6時に11人の仲間が特別便の全日航フレンドシップに乗って八丈島に向かうことができた。

金環食は時間的に余裕がなかったが、想像以上に明るかったと記憶している。今度の沖縄は飛行機ですぐに行けるが、台風などのため、日食前に飛び立てない可能性もある。ゆとりをもった計画をすることが大切だ。

※編集部注 このあと、佐藤さんのすばらしい35mmカラーズライドと8mmが投影された。当時、カラーフィルムはかなり貴重なものだったに違いない。フジとサクラ両方を使用してのスナップ写真では、30年近くたってもフジの変色が少なかったのに対し、サクラの変色は一目でわかるほど、ひどかった。写真の保存性の重要さを感じた。

なお、佐藤さんは当時の新聞切抜等を大切に保存されているので、次号で当時の様子を紹介する予定だ。

また、金環食の時のまわりの様子はどのようになるかの質問があり、山口先生から次のような回答があった。

60~70%の食分を超えると動植物に変化があると思う。金環食時の明るさを表現するのはむづかしいが、明るいのだが暗いといった感じで、新聞は十分に見ることができる。皆既日食のように地上の周囲の空が赤くなることはないだろう。

(文責：編集部)